

# 「家」の人類学的研究

——レヴィ＝ストロースからブルデューへ——

小 池 誠\*

## 1 は じ め に

「家（イエ）」は単なる家屋を指す語ではなく、ある家屋に住む人々の集団を指す語であり、日本社会において特別な重みを有する存在であった。日本において、多くの人が「家」という超世代的存在のために生まれ、生き、そして死んでいった。それは歴史を紐解けば明らかであるし、また、それを描いた文学は数知れない。

竹田は以下のように家族と対比させて、日本の「家」の特質を明らかにしている。

家族は短命であるのに、「家」は永続を願望されるからである。……「家」はこれを組成する家族構成員の生死や婚姻などの出来事と重大な相互関係をもつが、究極的にはそれらを超越して存在するのである。……「家」については終始「相続」の対象となるものであり、それが法的に整序されているのが通例である。……家族のまったくない「家」というものは原則として成り立たない。しかし、有形・無形の財産など「家」についたものが残っていれば、いったん廃絶家してからも縁故者をもって廃絶家再興を企てることもしばしばである。こうした「家」存続に対する観念には、単なる継承ではなく、超世代的・永久的に繁栄することを願望する気持ちが読みとれるのである。……「家」永続の願望はすべての時代と地域に共通し、家族の存在意義もこのような願望達成に参加すると

---

\* 本学文学部

キーワード：家、親族、戦略、レヴィ＝ストロース、ブルデュー

ころにこそ認められるといわなければならない [竹田 1970: 7-8]。

一般に「家」は日本独自の制度だと信じられているが、じつは日本の「家」に類似する社会制度は世界各地に存在したのである。近年、人類学の分野でフランスの人類学者レヴィ＝ストロースの研究 [Lévi-Strauss 1982] を嚆矢として、「家」(フランス語で *maison*, 英語で *house*) と「家社会」(*sociétés à maisons / house societies*) に関する研究がいくつも発表されている。本論ではレヴィ＝ストロースとその後の文化人類学的な家研究をレビューしたい。また、レヴィ＝ストロースの構造主義を批判し、「実践」の概念を提唱したことで知られるフランスの社会学者ブルデューの「戦略」の概念も参照することで親族研究における家概念の有効性を論じたい。

## 2 レヴィ＝ストロースの「家」の概念

レヴィ＝ストロースが本論で紹介するような「家」に関する議論を最初に明らかにしたのは、1976-1977年のコレージュ・ド・フランスにおける講義、「家の概念 (The Concept of 'House')」であった<sup>1)</sup>。それとはほぼ同じ骨子の家論が『仮面の道』<sup>2)</sup> に書かれている。また、1983年に発表された論文「歴史学と人類学」(邦訳はレヴィ＝ストロース [1985: 44-45]) にも「家」に関する議論が展開されている。レヴィ＝ストロースの研究は家屋の建築学的様式とか家屋のシンボリズムではない、「法人」としての「家」の人類学的な研究に大きなインパクトを与えた。レヴィ＝ストロース自身が言及しているように、「家」は平安時代の日本と中世のヨーロッパにおける「家」も含む壮大な概念である [Lévi-Strauss 1982: 174]。

レヴィ＝ストロースの議論は錯綜していて決して分かりやすいものとは言えないが、以下のような「家」の定義は家研究の出発点として極めて重要である<sup>3)</sup>。

物質的および非物質的財から構成されるひとつの財産 (an estate) を保有する法人 (a corporate body)<sup>4)</sup> であり、この法人は現実の系あるい

は想像上の系 (a real or imaginary line) にそって名前、財産、称号を伝えることを通して永続する。この連続性は親族関係 (kinship) または姻族関係 (affinity) の言葉において、たいていはその双方の言葉において表現されている限り正当な (legitimate) ものとみなされる。[Lévi-Strauss 1982 : 174]。

この定義では、家の成員権において出自は二次的な重要性しか持っていないのであり、従来の出自理論を越えたものとして「家」が設定されている。さらに、父系出自と母系出自、親子関係と居住など、対立する概念として捉えられてきたものが「家」において再統合されるのであり、出自と姻族関係が相互に置き換え可能なものになるとレヴィ＝ストロースは述べている [Ibid. : 184-187]。

レヴィ＝ストロースが「家」概念を編み出すきっかけとなっているのは、ボアズ (F. Boas) による北米先住民、クワキウトゥル (the Kwakiutl) のヌマイマ (numayma)<sup>5)</sup> という独特な親族集団の研究である。ボアズによると、個々の村に住む住民は一つの部族 (a tribe) を構成し、それはさらに「一つの種類」(one kind) を意味するヌマイマに分けられる。ヌマイマは厳格な社会的義務によって結ばれた最終的な単位 (the ultimate units) である [Boas 1966 : 37]。レヴィ＝ストロースは次のようなボアズのヌマイマに関する一節を引用する [Lévi-Strauss 1982 : 169]。

もし、我々がヌマイマを次のように考えるならば、最もよく理解することができる。生きている個人を無視して、ヌマイマを一定数の地位 (positions) から成るものとする。それぞれの地位にはランクと特権を意味する名前、『座席』または『立席』(a name, a 'seat' or 'standing place') が属しているのである。地位の数は限られていて、それらは一つのランク付けされた貴族層を構成する。…これらの名前と座席はヌマイマの骨組みであり、個人は人生の間にいくつかの地位を占め、そしてそれとともに地位に属している名前を獲得するかもしれない [Boas 1966 : 50]<sup>6)</sup>。

ボアズによると、ヌマイマはシブ (sibs) とかクラン (clans) という用語には当てはまらないものである。ヌマイマは母系でも父系でもなく、子供は出自のどのラインに属することも可能であるし、遺贈として系譜関係のないラインに属することもできる [Ibid. : 51]。レヴィ＝ストロースは単系・重系・無差別系 (unilineal, bilineal, undifferentiated) という3つの出自形態を横切る独自のカテゴリーとしてヌマイマ型 (*numayama* type) を設定している [Lévi-Strauss 1982 : 170]。さらにレヴィ＝ストロースは議論を進め、クローバー (A.L. Kroeber) によるカリフォルニアのユーロク (the Yurok) 社会の「家」概念を経て、日本と中世ヨーロッパの「家」を含む、地域と歴史を超越した「家」の一般議論を展開するに至ったのである [Ibid. : 171-174]。クワキウトゥルのヌマイマがレヴィ＝ストロースの「家」概念の出発点にあるために、彼以降の「家」をめぐる様々な議論において、ヌマイマ型の親族集団を中心的な概念として設定するのか、または「家」という言葉にこだわって建築物としての「家」を議論の前提とするのか、その後の研究者に議論と意見の対立を引き起こすこととなった。

レヴィ＝ストロース以降の家研究 [たとえば, Carsten and Hugh-Jones 1995 : 6-21] で議論的になったのは、レヴィ＝ストロースが親族を中心とする社会から階級社会への移行形態として「家社会」(the “house” societies)<sup>7)</sup>を捉え、進化論的枠組みのなかに位置づけようとする議論である。『仮面の道』に掲載されている論文の最後の部分で次のように書かれている。「家社会」は政治的・経済的利益が「古い血縁の絆」(old ties of kinship)をまだ乗り越えていない状況で出現するものである。「これらの利益が現れ、広がるためには、親族の言葉 (the language of kinship)」を借りなければならない。それは利益にとっては相容れないものであるが、他のものは使えないのである。また必然的に、親族の言葉を打破するためにのみ、それを借りるのである」[Lévi-Strauss 1982 : 186-187] とレヴィ＝ストロースは述べている。

同様の趣旨のことが「歴史学と人類学」という論文ではより明解な形で現

れている。

マルクスとエンゲルスに従って言うなら、「古い血縁の絆」がどのような方法で変化したかは、それに先行し生じたことから、いくらかは理解できるのです。家系的な諸集団が分裂するとき、そしてその諸断片が他の集団の諸断片と接合し、この再結合の結果からある種の新しいタイプの諸単位を誕生させるとき、ある重大なことが生じているのです。……数年前に私が家（maison）という言葉で名づけようとしたのは、このタイプの諸単位にたいしてでした。ヨーロッパ世界についていえば、このタイプの社会形成体を詳しく調べていた歴史学者たちは、家族とは区別される「家」は男系的に相続される家系とは一致しないこと、家は時として生物学的基礎を欠いていて、栄誉、血統、親族関係、姓と紋章、地位、権力と富などを含む物質的であり精神的でもあるひとつの遺産として構成されていることを、強調していました [レヴィ＝ストロース 1985：44]。

上記の部分に続いて、すでに紹介した「家」の定義と同じ文章が書かれている [前掲書：44-45]。レヴィ＝ストロースの「家」に関する議論は複数の論文の中で展開されていて [Lévi-Strauss 1982, 1987, 1991, レヴィ＝ストロース 1985]、その記述のなかには相互に矛盾する部分も多少は認められる。とはいえ、最初に提示した「家」の定義は家研究の出発点として常に参照されるべきものであると考える。レヴィ＝ストロース自体の家論も複雑であるが、以下に概観するようにその後に展開された議論も錯綜したものである。

### 3 インドネシアを中心とする家研究

フランスの国立科学調査研究所（CNRS）から『小屋から宮殿まで——島嶼部東南アジアにおける家社会』と題する論集が1987年に出版された [Macdonald (ed.) 1987]。ボルネオとフィリピン、ジャワ、半島部マレーシアを対象とする研究者が「家」または「家社会」に関する論文を寄稿してい

る。レヴィ＝ストロースが1977-1978年にコレージュ・ド・フランスで行った講義 [Lévi-Strauss 1987 : 153-159]<sup>8)</sup> において、ボルネオのイバンなど共系社会 (cognatic societies) を取り上げているのに編者のマクドナルドは示唆を受けている [Macdonald 1987 : 3]。彼はボルネオとフィリピンミンダナオの事例にもとづいて、階層が重要な役割を果たし<sup>9)</sup>、階層的な社会においてより明確な形で「家」が現れてくると述べている [Ibid. : 7]。

この論集の結論となる2本の論文のなかで、階層制と関連し「家」の類型化が試みられている。セラートは maison と Maison の区別を提起している。普通の居住単位を maison と呼び、封建的な社会における「支配的な家族」(les familles dominantes) を指すために Maison を使っている。セラートによれば、両方ともレヴィ＝ストロースによる定義に合致している。イバンには maison はあるが、Maison はなく、一方、フィリピンのスルタン国には封建時代のヨーロッパのように Maison はあるが、maison はないということになる [Sellato 1987 : 196]。また、本論でジャワの「家」を取り上げたヘッドレイは結論にあたる「兄弟姉妹関係のイディオム——東南アジアにおける一つの『家』の定義」という論文において、「家」を「弱い家」から「強い家」というスケールに置いて理解することを提起している。「弱い家」とはフェティッシュ化された家 (fetichized houses) であり、現実の親族の紐帯または擬制的な紐帯を通して相続される財と宝器、名前を共有する社会的集団ではない。これはジャワの農村社会にみられる「家」であり、「兄弟姉妹関係のイディオム」を用いることで広範な人々を包括しうるものである。一方、その対極に位置するのが「強い家」であり、「弱い家」と並立することもありうる [Headley 1987 : 214]。本論ですでに紹介したレヴィ＝ストロースの「家」の定義(『仮面の道』に書かれた定義)は、ほんらい「強い家」にのみ当てはまるものである。「弱い家」を含みうる広義の「家」の定義は、レヴィ＝ストロースの1977-1978年の講義にもとづいている。

続いて1993年に東インドネシア研究の第一人者であるフォックスが編集した『オーストロネシアの家の内部——生活のための居住デザインのパースペ

クティブ』[Fox (ed.) 1993] が出版された。これはフォックスを中心にして進められているオーストリア国立大学の比較オーストロネシア・プロジェクトの一環として出版された論集である。この本の内容を検討する前に、同じくフォックス編集で1980年に出版された『生命の流れ——東インドネシアに関する論文』[Fox (ed.) 1980] を簡単に紹介しよう。この序論においてフォックスは「家」の象徴論的側面だけでなく社会的側面に注目し、東インドネシアという地域における家研究に関して重要な視座を提供している。

「家」は一定の社会的単位を指すために東インドネシアで使用される基本的な文化的カテゴリーであると我々は結論したい。その適用の範囲は驚くほど多様であるが、このカテゴリーはいくつかの関連する特徴を有している。家はその本質上、究極的に特定の建築構造に中心をおく地縁性 (localization) (または起源) という考えを含意している。年長／年少という関係的カテゴリーは、家の内部または家間、さらに家が行うのと同様に互いの関係を主張するより広く定義された集団間の系統を区別するために一般的に用いられる。これらのカテゴリーはヒエラルキーを伴うが、このヒエラルキーが適用する性を限定しない。すなわち、父系の集団をもつ社会においては、年長／年少というカテゴリーは一団の男性の父系親族を指し、一方、母系制のテトゥンの間では、一団の近い系譜関係にある女性を指す。これらのカテゴリーの使用が含意する分節化の連続的な過程を考慮して、家はその地縁化された現れにおいて、第一に最小の外婚的集団を定義する傾向があり、それは必ずしもというわけではないが、婚姻の実際の締結に関わっている [Fox 1980 : 11-12]。

このフォックスの家概念はレヴィ＝ストロースが目指しているような従来の親族概念を乗り越えようとする意図はまったく認められない。とはいえ、インドネシア社会における集団としての家の研究はフォックスによって始まったともいえる。

『オーストロネシアの家の内部』に戻ることにする。オーストロネシア研

究を志向する論集であるので、扱われている地域はもちろんインドネシアに限定されることなく、西はスマトラのミナンカバウから東はポリネシアのマオリまで広がっている。この論集の目的は「オーストロネシアの多様な家 (houses) の空間的組織 (the spatial organization) を調べ、これらの家の居住デザインを家の内部に居住する特定集団の社会的実践と儀礼的实践に関連付けることである」[Fox 1993 : 1] とフォックスが第1章の冒頭で述べている。この目的が示すように、フォックスは家屋空間の利用に焦点を当てていて、すでに紹介したマクドナルドの論集を批判的に引用している。もちろん、この論集でフォックスはレヴィ＝ストロースの家概念に言及しているが、レヴィ＝ストロースとは別の方向の家研究を目指すことを明確に示している [Ibid. : 7]。

この論集の最後にウォーターソン [Waterson 1993] が島嶼部東南アジアの家屋に関する概括的な論文を寄せている。ウォーターソンはインドネシアのタナ・トラジャの家屋に関する研究者であり、同時に東南アジアの家屋を包括的な観点から取り上げている『生きている住まい』[Waterson 1990 (ウォーターソン 1997)]<sup>10)</sup> の著者でもある。また、家に関するワークショップと論文集における常連の参加者となっている [Waterson 1993, 1995, 2000, 2003]。

#### 4 家概念の一般化——レヴィ＝ストロースを超えて

上述の「家」に関する二つの論文集は東南アジア島嶼部またはオーストロネシア世界という地域的な限定のなかで「家」を研究することの意義を論じた本である。特定の地域に限定されない一般的な家概念の適用を目指した論文集として『家について——レヴィ＝ストロースを超えて』[Carsten and Hugh-Jones (eds) 1995] が1995年に出版された。レヴィ＝ストロースの研究に刺激され、1990年にケンブリッジでワークショップが開かれた。そこではレヴィ＝ストロースの家研究に対して評価を示しつつも批判的な検討が加えられた。ワークショップで発表された論文から、東南アジアと南アメリカ低地部について書かれたものが本書に掲載されている。この二つの地域は社



会組織の形態の上で顕著な共通性と対照性を示している [Carsten and Hugh-Jones 1995 : 1]。

この本の序論でカールステンとヒュー＝ジョーンズという2人の編者は、レヴィ＝ストロースの家社会論を超えて、より全体論的な建築の人類学 (a more holistic anthropology of architecture) を目指すと述べている。この論集の焦点は「建築物と人間と諸概念の相互関係にあり、民族誌的ケース・スタディを用いて、家が社会集団を意味し、そしてその回りの世界を表象する様々なやり方を明らかにすることである」 [Ibid.]。編者は社会集団としての「家」の研究と同時に、「家」と身体との相互関係を問題にし、「家を人格の延長」とみなしている [Ibid. : 2]。この点で、この論集はマクドナルド編の『小屋から宮殿まで——島嶼部東南アジアにおける家社会』が目指していた「家」の社会的側面の研究だけでなく、フォックス編の『オーストロネシアの家の内部』と同様に家屋空間の象徴論的研究も志向している。

カールステンとヒュー＝ジョーンズが共著で書いている序論を、レヴィ＝ストロースの家概念に対する評価という点に絞って多少詳細に紹介しよう。「家」に関してこの二人はレヴィ＝ストロースの「家」の定義（上で紹介した定義）を踏襲している。ただし、レヴィ＝ストロースの「家」は様々な解釈が可能な曖昧な概念であり、「家」の実態に関して多くの論点が浮かび上がってくる。「家」は階層社会にのみ当てはまる概念か、「家」を基本構造と複合構造の中間に位置する移行形態と捉えることは妥当か、また「家」はアフリカ研究で基本的な概念として用いられてきたリニジと異なるのかなどの論点を編者は取り上げている。「家」と階層性との関係はすでに触れたようにマクドナルドで論集の中心的テーマとなっていて、「家」をめぐる重要な問題点の一つである。編者自身は財の相続が問題になる以上、必然的に「家」はヒエラルキー的に序列化される (hierarchically ranked) と述べている。ただし、編者はこのように狭義の家概念に拘泥するわけでもなく、レヴィ＝ストロース自身の説明はこの点で曖昧であるとも指摘している [Ibid. : 7]。またこの論集に収められているケース・スタディの中には平等的な社

会（たとえば、ランカウイのマレー人）も含まれている。この論集の寄稿者であるウォータソンは、「家」をイバンのような平等的な社会から階層化された社会まで幅広く当てはまる概念だと捉えている。それゆえ、「この連続体一部にのみ『家』概念の適用を限定することは不可能にみえる」[Waterson 1995 : 67] と述べている。

レヴィ＝ストロースが「家」を進化論的図式の中に位置づけている問題については、編者は明確に批判しているわけではないが、論集に寄稿している著者とともに否定的に取り上げている [Carsten and Hugh-Jones 1995 : 10-13, 19]。筆者も実証性を欠く壮大な図式に「家」をはめ込むような議論には賛成しがたく考えている。筆者が調査を実施したインドネシア・スンバ社会<sup>11)</sup>ではレヴィ＝ストロースの有名な『親族の基本構造』[レヴィ＝ストロース 1977-1978] で論じられている「一般交換」の典型ともいえる結婚が行われている。父系出自をイデオロギーとして、母方交叉イトコ婚を規則とするスンバ社会であっても、「家」はまさにレヴィ＝ストロースが定義したような形で存在しているのである。「家」を基本構造と複合構造の中間に位置する移行段階とみなすことはできない。

筆者の議論にとってより重要なのは、「なぜ家はリニジでないのか (why are houses not lineages?)」[Carsten and Hugh-Jones 1995 : 15] という疑問である。わざわざ「家」という概念をあらたに持ち出さなくても、アフリカ研究で使われてきたリニジという概念で十分ではないかという意見である。この問題に対して編者は3つの答えを用意している [Ibid. : 15-17]。第一の答えは、「家」は非単系的要素を伴った出自集団であるというものである。編者はこの論集に収められているマッキノンの論文から次の文を引用している。「それ〔家〕は扱いづらい多くの付属品のついた雑種的な出自集団である (a hybrid descent group with a lot of awkward appendage)」[McKinnon 1995 : 173]。「家」が「親族の言葉」に依らざるをえないことはレヴィ＝ストロース自身が認めている点である [Lévi-Strauss 1982 : 187]。第二の答えは、上記の問いを逆転させて、「なぜリニジは家でないのか」と問い直すこと

である。リニジこそ「家」であるとみなすことができると編者は主張する。リニジとして記述されている集団も現地語（native terms）では「家」であることがある<sup>12)</sup>。出自とリニジという用語で説明されてきたアフリカの諸社会を「家」という観点から見直せば、有効に再分析できると主張する。第三に、「家」の研究によって、私たちの焦点が出自理論から共体系（cognatic systems）に移るといふ答えが書かれている。

筆者としては、これらの答えはどれも中途半端なものに思える。レヴィ＝ストロースの「家」の定義とともにすでに述べたように、「家」を従来の出自理論を越える独自の特徴をもった集団と明確に位置づけることが必要だと考える。もちろん父系出自など親族に関する分析概念は集団としての「家」を包括する上位の親族単位（たとえばクラン）を記述・分析するために必要であるが、あくまで「家」が建築物を指すという根源的な問題を「家」に関する議論の中心にすえるべきである。その点から考えれば、レヴィ＝ストロースの「家」に関する一連の著作において「家」の建築物としての特徴に関する詳細な関心が欠如している<sup>13)</sup>という編者の指摘〔Carsten and Hugh-Jones 1995 : 12〕は妥当なものである。これこそレヴィ＝ストロースの家研究の最大の欠陥であると筆者は考える。

とはいえ、編者が序論で書いているように、レヴィ＝ストロースの家研究の意義もまた大きい〔Ibid. : 20〕。「家」を通して特定の社会を見ることによって、従来の分析概念の束縛から逃れることができるようになったのである。このような家概念の利点は特定社会の研究だけでなく、比較研究<sup>14)</sup>においてもその効力を発揮する。この論集では東南アジアと南アメリカの諸社会に関する研究が取り上げられている。「家」を中心的な制度として取り上げているからこそ、これだけ広範な地域を一つの枠組みの中におくことが可能になったのである。また、編者が強調しているのは、「家」を包括的に捉えることの全体論的な可能性（holistic potential）である。建築物と集団との関係は多面的であり、社会集団のための複合的なイデオロム、ランク差を自然なものともなさせる手段、そして象徴的な力の源という「家」の役割は建築物

自体とは切り離せないものである。これらを編者はレヴィ＝ストロースの家研究を乗り越える点として強調している [Ibid. : 20-21]。

『家について——レヴィ＝ストロースを超えて』の編者は「家」という概念の全体論的意義を強調するために、「家」を狭い意味に限定して厳密に定義することなく、広義の家概念の必要を主張している [Ibid. : 20 ; Waterson 1995 : 50-51]。広義の家概念の有効性は筆者も認める点である。この本の編者が主張しているように、家概念を使うことによって、単なる出自・親族研究では見えてこないものが見えてくるようになるのであり、繋がらない領域が繋がるようになる。しかしながら、「家」に関する議論が百出するなかで、あえて「家」を使って説明しなくてよいことを、強引に「家」に結び付けているような研究論文も現れていて、家概念の適用には注意が必要である。

## 5 レヴィ＝ストロースからブルデューへ

これまでの家研究がヨーロッパの研究者が中心だったのにたいして、次に紹介する『親族を超えて』という論集はアメリカの研究者を中心にして執筆されていて、その点が他の論集と比べて異彩を放つこの本の特徴となっている<sup>15)</sup>。1996年にアメリカ人類学会で開かれたシンポジウム (Opening up the House: A Dialogue Across the Discipline) が本書のもとになっている。タイトルから分かるように、このシンポジウムは学際的な構成になっていて、企画者と編者を兼ねているジョイスとギレスピーは中米を研究対象とする考古学者であり、考古学者の中に文化人類学者が加わって「家」を議論するという形式になっている。

本の中では、ギレスピーが序論 [Gillespie 2000a] とレヴィ＝ストロースの「家」概念を論じた章 [Gillespie 2000b] を書いている。彼女が序論の冒頭で強調するのは、親族規則に焦点を当てた親族研究ではなく、親族に対する過程的アプローチ (processual approach) であり、日常生活のなかで関係性が構築されていく実践と理解に焦点を当てることである [Gillespie 2000a : 1]。また、レヴィ＝ストロースの錯綜する「家」論のなかで、「家」の定義、

とくに世代を超えた「家」の永続と連続性を重視する立場である [Gillespie 2000b : 27, 48]。そのため物質文化にも注目していて、この点が編者の考古学という学問的背景につながるものである。ギレスピーはレヴィ＝ストロースの「家」概念を論じた章の最後に、この論集独自の「家」への視座を提示している。「家」の通時的研究を目指し、「財産を維持し、それを次の世代に伝えるための社会的再生産の戦略の発展は、家および家社会の出現における決定的な要素である」[Ibid. : 50-51]と述べている。考古学を含む学際的な研究によって、「家」社会の出現と消滅に関する社会・政治的変動に関する研究が可能になると主張している [Ibid. : 51-52]。

すでに紹介した『家について——レヴィ＝ストロースを超えて』と対比させながら、『親族を超えて』で展開されている「家」に関する議論の特徴をもう少し詳しく検討してみよう。ギレスピーは過程的アプローチを強調しているが、『家について』でも編者のカールステンとヒュー＝ジョーンズは「プロセスとしての家」(The House as Process) [Carsten and Hugh-Jones 1995 : 36-42] という節を立てている。ただし、プロセスという言葉で意図される「家」へのアプローチは象徴論的儀礼研究に近いものである。レヴィ＝ストロースの家論を静態的なものと批判した上で、「家」自体が生きているものであり、人間の身体になぞられてイメージされると述べている。「家の人類学」の中心にそのような「家」の特性を置き、「家」とその住人を一つの生活プロセスの部分とみなしている [Ibid. : 36-37]。それに対して、『親族を超えて』の編者であるギレスピーは「家」とその住人を明確に区別し、社会集団としての「家」の成員と「家」を通して続くその永続性に注目している [Gillespie 2000a : 13]。単純化していえば、カールステンとヒュー＝ジョーンズが建築物としての「家」を議論の出発点に置いているのにたいし、ギレスピーは社会集団としての「家」を重視しているといえる。これはヌマイマ型の親族集団を出発点とするレヴィ＝ストロースの「家」の定義により則した家概念といえる。

ギレスピーが序論に当たる二つの論文で論じている家概念の検討には耳を

傾ける点が多いが、この論集に収められている論文にはあまり理論的にはみ  
るべきものがない。一例を挙げれば、メキシコのナファ社会を扱ったサンド  
ストロムの論文 [Sandstrom 2000] では、レヴィ＝ストロースの家概念をか  
なり拡張して事例分析に用いている。「家」をある屋敷地に建つ複数の住居  
に住む人々を包括する概念と規定している。彼が取り上げている事例は、い  
ちおう父系のイデオロギーがあっても、現実の諸々の状況によって世帯とそ  
の近くにある別の住居に住む世帯（分家）の親族的な構成が多様であるとい  
うことを示している [Ibid. : 64-68]。これはナファに限らずどこでもよくあ  
りうるケースであり、あえてレヴィ＝ストロースの「家」を持ち出さなくても  
十分に説明可能な現象だと筆者は考える。このようなケースにまで家概  
念を拡張して適用することは、「家」がほんらい持っている理論的な重要性  
を喪失させることになる。

以上のようにプロセスを重視した親族研究を志向するギレスピーは、レ  
ヴィ＝ストロースが提唱した規則によって拘束される構造の概念を批判し、ブ  
ルデューの「実践」と「戦略」の概念を家研究に導入しようとしている  
[Gillespie 2000b : 31]。これはギレスピーが論じている家論のなかの重要な  
ポイントの一つであると筆者は考えている。

ハビトゥス (habitus) の概念と並んで「戦略」(stratégie) はフランスを  
代表する社会学者ブルデューの「実践」(pratique) に対するアプローチのキ  
ーワードである。ブルデューの実践理論は西欧の社会科学における客観主義  
(たとえばレヴィ＝ストロースの構造主義的人類学) と主観主義 (たとえば  
ガーフィンケルのエスノメソドロジー) の対立の弁証法的な統合を目指した  
のである [田辺2002 : 548-552]。ブルデューのハビトゥスと実践の概念は次  
のように定義される。

生存のための諸条件のうちで或る特殊な集合に結びついた様々な条件  
づけがハビトゥスを生産する。ハビトゥスとは、持続性をもち移調が可  
能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造 (structures struc-  
turantes) として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能す

る素性をもった構造化された構造 (structures structurées) である。そこで実践と表象とは、それらが向かう目標に客観的に適応させられうるが、ただし目的意識的な志向や、当の目的に達するために必要な操作を明白な形で会得していることを前提してはいない。実践と表象とはまた、客観的に「調整を受け」(réglé)「規則的で」(régulier) ありうるが、いかなる点でも規則 (règle) への従属の産物ではない。さらに、同時に、集合的にオーケストラ編成されながらも、オーケストラ指揮者の組織行動の産物ではない [ブルデュ1988: 83-84 (Bourdieu 1980: 88-89)]。

ひじょうに晦渋で分かりづらい表現を用いているが<sup>s16)</sup>、ようするに人間の行為は構造に規定され規則に従っているが、全面的に構造に拘束されているわけではないことが述べられている。構造ないしは規則が人間の行為を規定していないとすると、そこで問題になるのは、「戦略」の概念である。

直接に第一次の利益 (例えば、うまくいった結婚によって得られる社会資本) をめざす戦略はしばしば二次的戦略と重なる。後者の戦略は、公的規則 (la règle officielle) の要求に従うように見せかけて利害関心を満足させ、規則を守る見かけさえあればどの行為にもほとんど普遍的に許される威信または敬意を累積させようとする。事実、集団が執拗に要求し、寛大に報いるものは、集団が崇めるふりをするものに対するあからさまな敬意に他ならない。

規則に合った実践 (des pratiques en règle) を行おうとする戦略は、すべての公認化戦略 (les stratégies d'officialisation) の特殊例であって、この公認化戦略の目的は、「利己的」・私的・個別的利益 (この概念はひとつの社会的単位と上位の包括的単位との関係の中でのみ定義される) を無私の利益 (*intérêts désintéressés*)——集団的、公的には認められる、合法的な利益——へと転換させることである [ブルデュ1988: 181 (Bourdieu 1980: 186)]。(カッコ内のフランス語は筆者による挿入)



「戦略」の概念を考える時に<sup>17)</sup>、ブルデュー自身による次の説明はより分かりやすく、晦渋な概念を理解する助けとなる。

戦略の概念は、客観主義的視点と、さらに構造主義が想定している（例えば、無意識な概念に訴えることによって）行為者なき行為とに対して手を切るための用具です。しかし、戦略とは、意識的・理性的計算が生み出すものでもなければ、無意識的プログラムが生み出すものでもありません。それは、ゲームのセンスのような実践的感覚（sens pratique comme sens du jeu）、歴史的に定義される個別的な社会的ゲームの実践的な感覚で、子供の頃より社会的活動に参加することによって獲得されます。……例えば私は、二股をかける戦略（les stratégies de double jeu）というのをいくつか記述しました。それは、きちんとけじめをつけ、法を味方につけておき、規則に従っているという態度をとりながら、利益にあわせて行動するという戦略です [ブルデュー 1991：101-102 (Bourdieu 1987：79)]。（カッコ内のフランス語は筆者による挿入）

ブルデューの戦略の概念では、人間の行為は構造に規定され規則に従っているが、全面的に構造に拘束されているわけではないとする実践の観念が前提にある [内堀 2003 参照]。筆者は戦略の概念の有効性は認めるけれども、その前提となっているブルデューのハビトゥスと実践の議論にみられる「ブラックボックス」 [田辺 2002：562-563] 的な性格は、具体的な民族誌的データにおいて適用を試みる時、大きな障害となると考えている。

ブルデューがレヴィ＝ストロースの構造主義を批判して「実践」と「戦略」の概念を提起したこと [ブルデュー 1988] を考えると、レヴィ＝ストロースの提起した「家」に戦略の概念を接合することは、奇妙であり無理なことにみえるかもしれない<sup>18)</sup>。しかし、レヴィ＝ストロース自身が「家」を論じる際にもともと「戦略」という語を用いているのである。ギレスピーが引用しているように [Gillespie 2000b：31]、レヴィ＝ストロースは「これらの〔共系社会の〕メカニズムは定義上、静態的である理念的規則から成るので



はない。むしろこれらは個人ではなく、法人を構成する個人よりも長い生命を保証された法人が精緻に作り上げ、実行に移した戦略なのである」と述べている [Lévi-Strauss 1987 : 180]。また、『仮面の道』に収められたレヴィ＝ストロースの論文では、「[クワキウトゥルの間で] 時と状況に応じて、利益を最大限にして損失を最小限に抑えるために、これら二つの原則〔外婚と内婚〕を同時に用いるのは良い戦略である」 [Lévi-Strauss 1982 : 183] と述べている。

「歴史学と人類学」と題された論文では、この点はより一般化された形で提起されていて、「構造と事件〔個人の戦略と選択〕の二元論をのりこえる必要があるのではないのでしょうか」とレヴィ＝ストロース [1985 : 52] は述べている。これは次節で論じるように、ブルデューの「実践」の概念を想起させる議論である。レヴィ＝ストロースが述べているように、父系出自と母系出自、親子関係と居住など、人類学者が対立する概念として捉えてきたものが「家」において再統合されること [Lévi-Strauss 1982 : 184] を考えると、「家」の成員がその存続と繁栄のために複数の親族的規則を秤に掛けながら「戦略」を駆使するのは論理的に必然的な展開である。本来は理論的に対立するはずのレヴィ＝ストロースとブルデューが「家」の議論において奇しくも出会い、ハーモニーを響かせたと言えるかもしれない。

## 6 「家」と社会変化

レヴィ＝ストロースを起点として「家」に関する論考をレビューしてきたが、その最後に取り上げるのは、スパークスとハウエルの編集による『東南アジアの家——変化する社会的・経済的・政治的領域』 [Sparkes and Howell (eds) 2003] である。ここに収められているのは1996年にオスロ大学で開かれた国際会議で発表された論文がもとになっている。アメリカ中心の『親族を超えて』と対照的に、北欧を中心にヨーロッパの人類学者が論文を寄せている。スパークスは北タイをフィールドとする人類学者で、もう一人の編者、ハウエルはマレー半島の先住民チェウォン (the Chewong) とインドネシア

のフローレス島のリオ (the Lio) で調査を実施している。東南アジア大陸部の双方的社会と東インドネシアの単系社会という対照的な社会を調査地とする2人が「家」に関するこの本の編者になっている<sup>19)</sup>。

最初にスパークスによる序論 [Sparkes 2003] を紹介しよう。この論集の目的は本の題名にもあるように、「東南アジアの家の概念を批判的に検討し、この地域の変化する社会的・経済的・政治的環境のなかで家の概念を詳しく論じることである」 [Ibid. : 1] と述べている。これまで紹介してきた『家について——レヴィ=ストロースを超えて』と『親族を超えて』がレヴィ=ストロースの錯綜した議論に引きずられ、たしょう複雑で分かりにくい議論を展開しているのにたいし、この論集は比較的単純な問題提起をしている。これまでの家論と異なるのは、「家」そのものの研究と同時に、「家」を社会変化と結びつけて論じている点である。また、社会集団としての「家」よりも建築物としての「家」に重点が置かれている。その結果、「家」は「ジェンダー化された領域 (a gendered domain)」 [Ibid. : 7], 「連続性の象徴」 [Ibid. : 9], そして「民族的アイデンティティの標識 (markers of ethnic identity)」 [Ibid. : 11] になるとスパークスは述べている。個々取り上げれば、東南アジアの慣習家屋の研究 [たとえば Waterson 1990] ですでに論じられていて、どれもとくに新味のない指摘といえる。しかし、従来の家研究がこれらの点を外的社会との関係から論じることがなかったので、全体として意味ある問題提起になっている。

スパークスに続いて、ハウエルは「家」に関する理論的検討をし、「家」が建築物であることを強調する [Howell 2003 : 21]。彼女はフォックスの家研究 [Fox (ed.) 1993] に近い立場をとっている。議論のなかで興味深いのは、「家」(家屋)は誇示 (display) するために適しているという指摘である。「家」は「伝統」とみなされているものを示し、また地位を誇示する。

## 7 結 び

これまで「家」に関する論集を取り上げ、それぞれの重要な論点を紹介し

てきた。ここで、いくつかの論点を整理しつつ、また従来の家研究で取り上げられなかった問題を含めて、筆者が考える「家」の概念を提示したい。家研究史のなかには、集団としての「家」を重視する研究（マクドナルドの論集 [Macdonald (ed.) 1987] およびジョイスとギレスピーの論集 [Joyce and Gillespie (eds) 2000]）と建築物としての「家」を重視する研究（フォックスの論集 [Fox (ed.) 1993] およびカールステンとヒュー＝ジョーンズの論集 [Carsten and Hugh-Jones (eds) 1995]、スパークスとハウエルの論集 [Sparkes and Howell (eds) 2003]）という二つの流れがあるといえる。もちろん上記の分け方は単純化したものであり、個々の議論のなかには上記の分類に矛盾するような記述も含まれている。「家」に関する議論の出発点であるレヴィ＝ストロースは、クワキウトゥルのヌマイマから彼独自の家研究を始めているのであり、集団としての「家」を中心に論じている。一方、レヴィ＝ストロースの家研究に大きな刺激を受けながらも、従来の家屋を対象とする象徴論的研究を引き継いでいるカールステンとヒュー＝ジョーンズなどの人類学者は、建築物としての「家」を議論の出発点に据えている。

筆者は、家屋を意味する民俗語彙 (folk terms) がある種の親族集団を指して用いられることを「家」に関する議論の大前提であると考えている。「現地のカテゴリー (native categories)」[Carsten and Hugh-Jones 1995 : 20] または「現地の概念 (indigenous concepts)」[Gillespie 2000a : 6] の重要性は多くの研究者が指摘する点である。以下に議論するような親族集団としての諸特徴および家屋であるがゆえの媒体としての役割などはすべて建築物を意味する語が社会的集団を指すことから派生する「家」の特徴であると考えている。

これまで紹介した「家」にまつわる研究のなかには屋敷地集団を「家」とみなすような議論 [Sandstrom 2000] も存在した。「家」を広義に捉えて個別社会の事例に適用するのは不毛な家論につながる試みだと筆者は考える。たしかにギレスピー [Gillespie 2000a : 6, 15] が主張するように、「家」は「発見論的な (heuristic)」意義をもつ概念である。集団としての「家」を

広義に幅広く捉えるからこそ、「家」の比較研究を主眼とする論集が立て続けて刊行され、行き詰まりを見せた人類学の親族研究に活性化をもたらしたのである。筆者のように狭義に限定した家概念では、これほどまでの議論を巻き起こすことはなかったであろう。とはいえ、レヴィ＝ストロースが議論したような「家」を個別社会に適用する場合には、ある程度は家概念を限定する必要があると考える。

集団としての「家」を考える時に、レヴィ＝ストロースの定義 [Lévi-Strauss 1982 : 174] は有効であり、無視できないものである。「家」を論じた多くの研究者もこれは認めている点である。この定義の要点をここで整理しよう。第一に、「家」は物質的および非物質的財から構成されるひとつの財産を保有する「法人」であり、第二に、「家」は現実の系あるいは想像上の系にそって名前、財産、称号を伝えることを通して永続し、第三に、この連続性は親族関係または姻族関係の言葉において、たいていはその双方の言葉において表現されている限り正当なものともみなされるのである。最後の点を言い換えると、「家」の成員補充において、父系とか母系という出自が特権的に「家」の成員権を決定するのではないということになる。レヴィ＝ストロースの定義のもとになっているのはヌマイマ（本義は「一つの種類」）であるので、上記のような「法人」が家屋とどのような関係にあるかは、まったく論じられていない。筆者は「家」が家屋であることを前提にするので、「家」の所属に関して居住の問題が重要な役割を果たしていると考え。ただし、ここでいう居住とは必ずしも実際の永続的な居住に限定されるのではなく、象徴的な意味での居住、たとえば家屋で執行される儀礼への参加なども含むものである。

「家」が所有する財産には儀礼財も含まれているし、また、さらに重要なのは「家」が人間だけでなく、祖霊など霊的存在の住処にもなりうるということである [cf. Carsten and Hugh-Jones 1995 : 37]。その結果、親族集団として執り行う儀礼は「家」を中心として展開されることになる。「家」における儀礼の執行はすでに述べたように、「家」の成員権の問題と深く結びつ

いている。

上記の定義の述べられているように、「家」にとって財産の所有とその相続が根本的な重要性を有する以上、王国のように高度に階層化された社会でなくても、「家」はある程度階層化された社会に存在するものである [cf. Carsten and Hugh-Jones 1995 : 7 ; Waterson 1995 : 51-52]。「家」は社会内部における差異化または競争を伴うものであると筆者は考える。その点で、家間の競争に関するギレスピーの次のような指摘は重要である。「レヴィ＝ストロースの例における家は、本質的に非対称的であり時間とともに変化する競争的な家間の相互行為 (competitive between-house interactions) の文脈においてもっとも明白になる。すべての家が同じというわけではない」[Gillespie 2000a : 9]。

社会内部において家間には競争的關係があると同時に、「家」は他の「家」との間に何らかの連帯 (alliance) があって始めて存続が可能になるのである。「家」は単独では生きていけない。「家」は他の「家」との交換關係を必要とする。とくに女性の交換は家の再生産 (reproduction) にとって不可欠である [レヴィ＝ストロース 1977-1978参照]。もちろん「家」にとって縁組關係 (alliance) は妻の与え手と妻の受け手の間の敵對關係と緊張の源になる可能性を秘めたものであることも忘れてはいけない [Lévi-Strauss 1987 : 155 ; Carsten and Hugh-Jones 1995 : 8]。しかし、「家」は不安定な縁組關係を、たとえ幻想的な形態であれ (if only in an illusory form), 固定化させる役割を担っている [Lévi-Strauss 1987 : 155]。

「家」が建築物に根拠をおくために、親族集団の分節化は、家間の關係または家屋の内部空間の分割という形をとって具体的に表現されることになる [Fox 1980 : 11-12]。「家」がある種の親族集団になるからといって、「家」がその社会における唯一の親族的な単位になることはほとんどない。「家」はより大きな親族集団 (クラン) の構成単位であることも多い。レヴィ＝ストロースが定義する「家」が従来の出自理論・親族理論を越えようとする意義を有することは確かであるけれども、いわゆる「家社会」が必ずしも「家」

だけから構成されるとは限らない。「家」とそれ以外の親族的集団（「家」より上位の集団および「家」の下位単位）との関係を考える必要がある。レヴィ＝ストロースが想定しているような親族を中心とする社会から階級社会への移行形態として「家社会」が出現するという進化論的な枠組みは妥当ではないと考える。

これまで集団としての「家」について論じてきたが、家屋としての「家」が必然的に有する物質的特徴も忘れてはいけない。家屋は一種の媒体（medium）として、社会内外の人々に対して何らかのメッセージを送るものだと筆者は考えている。ハウエルが述べているように、家屋の規模・様式・装飾はその「家」のランクを示すものであるし、また家屋が「民族的アイデンティティ」を表示することもある [Howell 2003 : 11, 16]。

最後に、「家」と「戦略」の概念との関係に触れたい。「家」はレヴィ＝ストロースが論じたヌマイマと同様に、ある社会内部の枠組みまたは構成単位としては固定的なものであるが、そこへの帰属（容器に入中味）という点ではひじょうに融通性に富む概念である。このように親族的規則が全面的に「家」の成員権を決定しない以上、家間の競争的な関係を背景にして、「家」の構成員が「戦略」を駆使して最大限の利益を得ようとするのは当然の帰結である。とはいえ、同時に人々は「かくあるべし」と定める当該社会の親族的なイデオロギーにも縛られているのであり、家構成員間および家間の相互行為を論じる上でブルデューの「戦略」の概念がその効力を発揮するのである。

本論の冒頭で日本の「家」について言及した。たとえば武士階層の「家」の継承は「戦略」の概念を適用すべき格好の事例を提供している。江戸時代における家系の継承を人口社会学の立場から研究した坪内によると、「誰が養子になるかについては、状況的要因あるいは地方文化的要因が介入し、実子の間で見られるような順位の厳密さが見られない。日本の『家』における長男相続制度は、この部分である種の融通性に溶けこむのである」（下線は筆者による）[坪内 2001 : 5]。拙稿で紹介した家概念は文化人類学に限定さ

れることなく、家族社会学・歴史学など幅広く検討されるべき問題である。

## 注

- 1) 筆者が参照したのは講義録の要約を英訳したものである [Lévi-Strauss 1987 : 151-152]。
- 2) 原書 *La voie des Masques*. は1979年に発行されていて、筆者はその英訳 [Lévi-Strauss 1982] に依拠している。
- 3) 本論を書く時、遠藤 [1986] を参照している。この論文は日本においてレヴィ＝ストロースの家概念を取り上げた最初の論文であり、参考になる点が多くあった。
- 4) フランス語の原文では ‘personne morale’ であり [Carsten and Hugh-Jones 1995 : 254 n. 8], 「団体」という訳語よりも「法人」の方がふさわしい。
- 5) レヴィ＝ストロースの記述の中には、ヌマイム (*numaym*) という語も登場し、統一されていない。
- 6) 本論では、直接ボアズの民族誌 [Boas 1966] から引用している。
- 7) Lévi-Strauss [1982] では, societies with “houses” [Ibid. : 182] という表現も使われている。ちなみに、フランス語では sociétés à maisons である。
- 8) すでに紹介したように1976-1977年の「家の概念」という講義は『仮面の道』に再録されているが、その翌年の講義、「インドネシアについて」はレヴィ＝ストロースの講義録 [Lévi-Strauss 1987] にのみ収められている。この講義ではマルクスのフェティシズム概念が「家」と結びつけて論じられている。彼の家概念は最初の段階よりもさらに拡大されていて、錯綜の度合いはよりいっそう深まっている。
- 9) 『小屋から宮殿まで——島嶼部東南アジアにおける家社会』という論集のタイトルは、階層制とのつながりを示している。
- 10) この本でウォータソンは建築の民族史的研究から、建築学的研究、家屋のシンボリズムとコスモロジー、家の社会的側面（親族関係）、社会変化まで、多様な観点から東南アジアの建築を取り上げている。
- 11) スンバ社会の「家」については、小池 [1989, 1993, 1998, 佐藤・小池 1995] ですでに論じている。
- 12) レヴィ＝ストロースの家研究の意義として、「土着のカテゴリーの重要性 (the priority of native categories)」を喚起させた点にあると編者は書いている



[Carsten and Hugh-Jones 1995 : 20] 。

- 13) これはレヴィ＝ストロースの家研究の出発点がヌマイマという親族集団にあって、家屋ではないということに起因すると考える。
- 14) 文化人類学において比較研究に対して様々な批判が浴びせられ、時代遅れなものとしてみなされがちである（『民族学研究』68/2で「人類学の方法としての比較の再検討」と題する特集が組まれている）。比較という方法の持つ様々な問題点は無視できないが、人類学にとって比較研究は不可欠な方法論だと筆者は考えている。その立場でいえば、この特集の最初に掲載されている出口[2003]の議論に共感する点が多い。また、レヴィ＝ストロースが提起した「家」という概念とその定義はその後様々な立場の研究者の間で多くの議論を引き起こしたという意味で、人類学において意義あるものだと捉えている[中川 2003 : 276参照]。
- 15) 「家」に関連したシンポジウムと論集の常連であり、インドネシア研究者であるマッキノン（Susan McKinnon）とウォータソンも参加している。
- 16) 田辺は新書『生き方の人類学』のなかで、上で引用した部分を一般向けに分かりやすく言い換えている[田辺 2003 : 87]。
- 17) 戦略の概念についても、田辺は分かりやすい表現で解説している[田辺 2003 : 94-96]。
- 18) ブルデューはアルジェリアのカビルの家屋について「家または転倒した世界」[ブルデュ1990 : 211-231]という論文を書いている。ここで家を論じていても、集団としての「家」ではなく、家屋空間のレヴィ＝ストロース的な構造分析を試みている。しかし、田辺 [2002 : 546]によれば、この論文は空間構造と身体運動の関係を論じていて、「レヴィ＝ストロースの構造主義的思考のぎりぎりの境界に止まりながら、そこから決別する道筋の模索」と位置づけられる。
- 19) スパークスはこれまでの紹介した「家」に関する論集に論文を書いていないが、ハウエルは『家について』にフローレス島のリオの「家」に関する論文[Howell 1995]を載せている。ちなみに、『東南アジアの家』には家研究の常連であるウォータソンもスラウエシのトラジャの「家」に関して論文[Watsonson 2003]を書いている。

## 参考文献

ウォータソン, R, 1997, 『生きている住まい——東南アジア建築人類学』（布野修司監訳）学芸出版社。



- 内堀基光, 2003, 「サラワク・イバン社会における小家族の編成と機略的行為」『アジア・アフリカ言語文化研究』65: 1-18。
- 遠藤央, 1986, 「〈イエ〉概念の可能性——東インドネシアの事例を手がかりとして」『社会人類学年報』12: 55-85。
- 小池誠, 1989, 「イエとムラ——インドネシア・東スンバ社会におけるイデオロギーと現実」『民族学研究』54-2: 137-165。
- , 1993, 「東インドネシアの家」須藤・秋道・崎山編『オセアニア② 伝統に生きる』東京大学出版会。
- , 1998, 「東インドネシアの「家」と縁組」『社会と象徴——人類学的アプローチ（村武精一先生古稀記念論文集）』岩田書院。
- 佐藤浩司・小池誠, 1995, 「巨大なとんがり屋根の謎——スンバ島の家屋〔続・穀倉に住む〕」『季刊民族学』74: 6-17。
- 竹田旦, 1970, 『「家」をめぐる民俗研究』弘文堂。
- 田辺繁治, 2002, 「再帰的人类学における実践の概念——ブルデューのハビトゥスをめぐり, その彼方へ」『国立民族学博物館研究報告』26-4: 533-573。
- , 2003, 『生き方の人類学——実践とは何か』講談社現代新書。
- 坪内玲子, 2001, 『継承の人口社会学——誰が「家」を継いだか』ミネルヴァ書房。
- 出口顯, 2003, 「人類学の方法としての比較の再検討——序にかえて」『民族学研究』68-2: 214-225。
- 中川敏, 2003, 「『宗教とは何か』とは何か」『民族学研究』68-2: 262-279。
- ブルデュー, P., 1988, 『実践感覚1』（今村仁司・港道隆訳）みすず書房。
- , 1990, 『実践感覚2』（今村仁司ほか訳）みすず書房。
- ブルデュー, P., 1991, 『構造と実践（ブルデュー自身によるブルデュー）』（石崎晴己訳）藤原書店。
- レヴィ＝ストロース, 1977-1978, 『親族の基本構造 上・下』（馬淵東一ほか訳），番町書房。
- , 1985, 「歴史学と人類学」『思想』727: 35-55。
- Boas, Franz, 1966, *Kwakiutl Ethnography* (edited by Helen Codere), Chicago: The University of Chicago Press.
- Bourdieu, P., 1980, *Le sens pratique*, Paris: Le Editions de Minuit.
- , 1987, *Choses dites*, Paris: Le Editions de Minuit.

- Carsten, Janet and Stephan Hugh-Jones (eds), 1995, *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 1995, Introduction: About the House——Lévi-Strauss and Beyond, in Carsten, Janet and Stephan Hugh-Jones (eds), 1995.
- Fox, James J., (ed.), 1980, *The Flow of Life: Essays on Eastern Indonesia*, Cambridge : Harvard University Press.
- , 1980, Introduction, in Fox, James J. (ed.), 1980.
- (ed.), 1993, *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*, Canberra: The Australian National University.
- , 1993, Comparative Perspectives on Austronesian Houses: An Introductory Essay, in Fox, James J. (ed.), 1993.
- Gillespie, Susan D., 2000a, Beyond Kinship: An Introduction, in Joyce, Rosemary A. and Susan D. Gillespie (eds), 2000.
- Gillespie, Susan D., 2000b, Lévi-Strauss: Maison and *Société à Maisons*, in Joyce, Rosemary A. and Susan D. Gillespie (eds), 2000.
- Headley, Stephen C., 1987, The Idiom of Siblingship: One Definition of “House” Society in South-East Asia, in Macdonald, Charles (ed.), 1987.
- Howell, Signe, 1995, The Lio House: Building, Category, Idea, Value, in Carsten, Janet and Stephan Hugh-Jones (eds), 1995.
- , 2003, The House as Analytic Concept: A Theoretical Overview, in Sparkes, Stephen and Signe Howell (eds), 2003.
- Joyce, Rosemary A. and Susan D. Gillespie (eds), *Beyond Kinship: Social and Material Reproduction in House Societies*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Lévi-Strauss, Claude, 1982, *The Way of Masks*, Seattle: University of Washington Press.
- , 1987, *Anthropology and Myth: Lectures 1951-1982* (trans. by Roy Willis), Oxford: Basil Blackwell.
- , 1991, Maison, in Bonte, P. and M. Izard (eds), *Dictionnaire de l'ethnologie et de l'anthropologie*, Paris: Presses Universitaires France.
- Macdonald, Charles (ed.), 1987, *De la hutte au palais: sociétés “à maison” en Asie du Sud-Est insulaire*, Paris: Editions du CNRS.
- Macdonald, Charles, 1987, Histoire d'un projet: de la notion de “maison” chez Lévi-

- Strauss à la comparaison des sociétés en Asie Sud-Est Insulaire, Macdonald, Charles (ed.), 1987.
- McKinnon, Susan, 1995, Houses and Hierarchy: The View from a South Moluccan Society, in Carsten, Janet and Stephan Hugh-Jones (eds), 1995.
- Sandstrom, Alan R., 2000, Toponymic Groups and House Organization: The Nahuas of Northern Veracruz, Mexico, in Joyce, Rosemary A. and Susan D. Gillespie (eds), 2000.
- Sellato, Bernard, 1987, “Maisons” et organisation sociale en Asie du Sud-Est, Macdonald, Charles (ed.), 1987.
- Sparkes, Stephen and Signe Howell (eds), 2003, *The House in Southeast Asia: A Changing Social, Economic and Political Domain*, London: Routledge Curzon.
- Sparkes, Stephen, 2003, Introduction: The Changing Domain of the House in Southeast Asia, in Sparkes, Stephen and Signe Howell (eds), 2003.
- Waterson, Roxana, 1990, *The Living House: An Anthropology of Architecture in South-East Asia*, Singapore: Oxford University Press.
- , 1993, Houses and the Built Environment in Island South-East Asia, in Fox, James J. (ed.), 1993.
- , 1995, Houses and Hierarchies in Island Southeast Asia, in Carsten, Janet and Stephan Hugh-Jones (eds), 1995.
- , 2000, House, Place, and Memory in Tana Toraja (Indonesia), in Joyce, Rosemary A. and Susan D. Gillespie (eds), 2000.
- , 2003, The Immorality of the House in Tana Toraja, in Sparkes, Stephen and Signe Howell (eds), 2003.

## **The Anthropology of ‘House’: From Lévi-Strauss to Bourdieu**

Makoto KOIKE

The aim of this paper is to examine the concept of ‘house’ and ‘house societies’ whose definition and description was introduced by Claude Lévi-Strauss. The concept of the house as a social group was elaborated by him while anthropologists were concerned with the material and symbolic aspects of houses. Lévi-Strauss defined the house as ‘a moral person’ which perpetuates itself through the transmission of its name, its goods, and its titles down a real or imaginary line. I try to review the writings inspired by his ideas on the house, which are problematic and left nagging questions unresolved. He concluded that the house is not a social group delimited by rules of descent or residence. The less rule-bound aspect of the house requires the concept of ‘strategy’ proposed by Bourdieu. The members of a house employ strategies aimed at its perpetuation against the backdrop of collective constraints.